

## コルカタへ

重たい鉄格子を  
ガタピシと揺すり  
インド国有鉄道の長い客車が  
陽光に煌きながら  
まっすぐにコルカタを目指す  
生ぬるい風そよぐ広大な沃野  
逞しい肉付きの赤茶色の牛達が  
美しい泥の園に  
恵みの鋤を入れて行く  
横一列になって  
苗を植え付ける村々の男女  
畦道を、自転車で駆けて行く少年  
彼の後を追うように  
甲高い歓声が沸き起こる  
褐色の少女の真っ赤なワンピース  
見よ！ 命の根源に光る、諸々の物象よ！  
田畑、泥流、鉄橋、古城に喬木よ！  
人々の群がる市場の活気と排ガスの臭い！  
緑なす大河に身を浸しながら洗濯婦の一群！  
まだらな藪と果て知らぬ荒野に続く轍よ！

ここは、亜細亜文明揺籃の地  
インド亜大陸

神々の闇深きかんばせ

御仏の豊かな胸の裡に

草木は悶え、人々は高地に汗を流す

むんと蒸せ返すは、うず高きゴミの山々

私は客車三段ベッドの一番上で横になり

小さなゴキブリたちを友に

車内販売のエッグ・カレーを掻き込む

通路の反対側では

鮮烈なピンクのサリーが

熱風はためき

ご婦人方は、乳飲み子を抱え昼寝のお時間

全身を使ってゴミを掃く

下層カーストの少年

その瞳はまっすぐに私を射抜く

高く高く伸ばされた細い腕、いびつな関節で

世界に対し、今日一日の命を掴み取る

神の像を手に

喜捨を乞う老婆の震える手

デジタル音楽プレイヤーを耳にした

ビジネス青年の瞳に

彼女の姿は映らない

青年の網膜の裏側で

灼熱の大地が、溶け出して行く

無駄な足止め、うずくまる客車

しかめっ面のチャイ売り

無遠慮な男は、私に煙草をねだり

反対車線には

真っ黒な石油貨車もひと眠り

ビーリーの手に付く

ヤニを舐めればただ苦く

警官はホームで男を殴っている

何度も

びっこをひく野犬、病に爛れたその皮膚

灼熱の太陽は、それら悲惨な色彩に

マンゴーの艶やかなぬめる果肉に

等しくその行状を照射し

汚物は腐り、少女は微笑む

血に飢えたカーリー女神、たかる蠅よ！

私の生を、いっそのこと

あなたに全て捧げてしまいたい

私の凡庸は、それでいて

ささやかに精一杯、生きて来た道も

あなたの御足の下では

ひとしずくの汗にも及ばないのか


受け止めよう、この私の肉体を通して！

猛烈な生の脈動が

この大地を満たしているのを

私に本質的な信頼の感動を分け与える

血に飢えたカーリー女神、たかる蠅よ！



私がどこからやって来て  
やがてはどこへと向かおうとしているのか  
あなたは全てお見通しのようです

# 歌が聞こえて来る

森の中

岸に打ち上げられた

死に魚のような瞳で

おののき、朽ちて行く

眼差しの乱反射

時の果実が地に墮ちる時

夜通し泣き続ける

赤子の傍では

闇が、どこまでも拡がっていた

幾億と塗り重ねられた

古い仏画の絵具のように

ぼろぼろと剥がれ落ち

露わになった景色の向こう側

智慧の樹が

強く風に煽られ、大きく軋む

老人はその傍で

最期の笑みを浮かべた

灯火が、流れを下って行く

曲がりくねった

わたくしたちの道のように

生と死の曳き舟を越えて

第二の眼が、永遠に溶けてゆく

そして、虫は鳴き続ける



脈を打った気、またの名を嵐  
晴れた霧の中で微笑んでいたのは……

陶酔の泉から

汲み取られた果实

零れ落ちる

再び、沈黙の星間へ

歌が聞こえて来る

この深い闇の真ん中で

焚き火を囲み円舞する

地層の踊り子たちよ

清らかな一筋の涙のように

まだ微かに瞬いている明け方の星のように

深く、鉦脈を天に穿ってはくれないか

# 祈りの地

炉辺は音を立て

猫たちは丸くなる

真言響くこの夜に

月はただしんしんと

大河の源流へと降り注ぐ

星図が弧を描き

祈りの裡に

旋回するのだが

家畜の微かな鈴鳴りの音と

そのことで、目を覚ます者はいない

土地を護るのは

観世音菩薩の微笑みの風

繰り返される真言は

オム・マニ・パメ・フーン

蓮華の宝珠に幸いあれ

生まれている

いつも

舞い落ちる葉々

芽吹く蕾に抱かれて

蓮華の宝珠に幸いあれ

私もまた、生まれていたので  
酷く穏やかに死にながらも

蓮華の宝珠はやがて  
緩やかに

その姿を私に顕すだろう

万人の父、万人の持つ幾億の瞳  
祈禱師に舞い降りる

懐かしき人々の心、また心よ

観世音菩薩の微笑みは

私たちの全てを識っておられるがゆえ

あの幼き日々

万人の父、万人の母が見つめておられた  
教えられないほどの

夕日に伸びる長い影、また影を

私もまた、見ていました

驢馬の母子が

並んで歩いているのを

村の小道を、並んで帰って行きました

南無観世音菩薩


やって来ては、やがては去り行く者よ

私はまた、見ていました

人々の心の、深く落ち込んで行く様を  
それを人々は、歴史と呼んで

二度とは癒えぬ悲しみとして抱きながら  
あなたの御名を唱え続けるのでしょうか





南無観世音菩薩

やって来ては、やがては去り行く者よ

今朝は少し、雪が降りました

オム・マニ・パメ・フーン

蓮華の宝珠に幸いあれ